

両国大川屋

懐かしい味、吉良まんじゅう

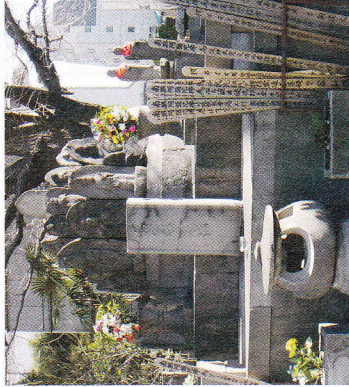


吉良邸のすぐ目と鼻の先に和菓子老舗、両国大川屋がある。ここ名物はその名もずばり、吉良まんじゅう。1個180円で、黄な粉の餡が珍しい。ほんのり甘く、昔懐かしい味。ほかに、都鳥をかたどった隅田川もなか(1個180円)もある。

▲吉良まんじゅう

【問合せ先】電話 03-3631-3759 / 10:00~18:00 / (月) 休み

▼参道左手にある「明暦大火犠死者等供養塔」



▼力塚の碑。江戸後期、勧進相撲興行の中心は両国院だった



首の行方

赤穂浪士に討たれた吉良上野介の首は、泉岳寺の浅野内匠頭の墓前に手向けられた後、泉岳寺から吉良邸に返された。その後、外科医の栗崎道有によって胴体とつなぎ合わされ、萬昌院功運寺(▶P125)に埋葬された。道有は、松の廊下の刃傷事件でも、上野介の治療にあたっていている。

二 回 向 院

入山を拒否された赤穂浪士

いったん京葉道路まで戻り、両国橋に向かって歩いていくと、通り沿いに回向院の正門が現れる。本懐を遂げた浪士たちがまず向かったのが、回向院だった。当時、吉良邸の裏門と回向院は、道路をはさんで向きあっていた。浪士たちはこの寺で休息をとり、吉良家の親戚、上杉家の援軍に備えるつもりだったが、かわりを持つことを恐れた住職は、門を開けなかった。一回はやむなく、両国橋の方へと歩き出したという。

回向院の起こり

そもそも回向院は、明暦3(1657)年の大火で亡くなった10万人のうち、無縁仏を回向するために建立された。正式名称を諸宗山無縁寺回向院といい、その後も、災害の犠牲者や病死者などが葬られた。江戸時代には広大な寺域を持ち、現在、両国シテイコア(両国国技館跡地)がある辺りも境内だった。

この寺はまた、勧進相撲が開かれたことでも知られ、付近には国技館をはじめ相撲部屋が多い。参道左手には力塚と刻まれた大きな記念碑が立つ。

境内には、江戸時代の人気酒落本作者山東京伝など、著名人の墓も多い。その中のひとつ、鼠小僧次郎吉の墓は、昔から墓石を削り取って持ち帰ると運がつくとか金持になれるとかいわれている。そのため、墓石は欠けて丸くなっている。

三 両 国 橋

隅田川2番目の橋

回向院に入山を拒否された赤穂浪士たちは両国橋へ向かい、東詰の空き地で隊列を整えたという。回向院から両国橋までは2~3分ほどの距離だ。両国橋は、万治2(1659)年に初めてかけられた。江戸時代初めまでは、江戸城防衛のため千住大橋以外、隅田川に架橋することは禁じられていた。しかし、明暦3年の大火の折、この付近に殺到した群衆が行き場を失い、焼死したり水死したりしたため、幕府も

▼両国橋の碑



▲江戸後期の盗賊、鼠小僧の墓

余 話

義賊の正体

芝居やテレビに登場する鼠小僧は、金持から盗んだ小判を貧乏人にばらまき正義の大泥棒だ。でもそれは、芝居の上での話。実際の鼠小僧は、生涯に3000両もの大金を盗んだが、ほとんど「飲む」「打つ」「買う」で使ってしまったらしい。当時は、10両盗めば死罪と決まっていた。天保3(1832)年にあえなく御用になると、市中引き回しのうえ磔にされたという。

必要性を痛感し、架橋した。

橋の長さは、96間(約175メートル)。1年がかりで完成した。架橋後も、洪水のたびに流されたり壊れたりしたため、管理が大変で「金食い橋」とも呼ばれたそう。

かつて橋の両側には広場があり、茶屋や芝居小屋、見世物小屋、飲食店などが建ち並んでいた。江戸随一の繁華街としていた。橋のたもとに児童遊園入り口がある。橋のたもとに児童遊園入り口がある。橋のたもとに児童遊園入り口がある。橋のたもとに児童遊園入り口がある。